

名誉市民・熊井啓さん逝く

さようなら。熊井監督

安曇野市の名誉市民で映画監督の熊井啓さんが5月23日、東京都内の病院でお亡くなりになりました。享年76歳でした。

熊井監督は、1930年豊科生まれ、信州大学文学部を卒業。帝銀事件を扱った「帝銀事件・死刑囚」(64年)で監督デビューし、黒部ダム建設を描いた

「黒部の太陽」(68年)、松本サリン事件を題材にした「日本の黒い夏 冤罪」(2001年)など、日本の暗闇を鋭い感性で問いただす、社会派の作品を数多く発表しました。86年には「海と毒薬」がベルリン国際映画祭銀熊賞を、89年には「千利休 本覺坊遺文」がベネチア国際映画

祭サンマルコ銀獅子賞を受賞するなど国際的にも高く評価されています。国内ではその実績から95年に紫綬褒章、01年には勲四等旭日小綬章を受章しました。安曇野とのつながりは深く、著書「続 池塘春草の夢」の中には「静かな夜明け、東の空が白み、南安曇農業高校の木々で小

鳥たちの声が囁り、太陽が昇るにつれて、雲は刻々と色を変える。こうした私のイメージの世界は、誰も、いかなる力も消し去ることのできないものだ」と記しています。映画「朝焼けの詩」(73年)、「愛する」(97年)、「日本の黒い夏 冤罪」(01年)では、安曇野が撮影地として登場し、幼少期に記憶した故郷の風景や体験が、監督の創造の原点として根ざしていることがうかがえます。

熊井監督の軌跡



現在の豊科保育園の近くで幼少期を過ごした。(1933年)



信州大学文学部演劇部を創設。学生の枠を超えた活動を展開。(1949年ごろ)



高校の後輩、松本市出身の井口明子さんと結婚。(1962年)



自作のシナリオ「帝銀事件・死刑囚」で監督デビュー。(1964年)シナリオは豊科郷土博物館所蔵



ベネチア国際映画祭サンマルコ銀獅子賞など、数多くの賞を受賞した。(1989年)



豊科町名誉町民称号贈呈式。旧豊科町では田淵行男に続き2人目。(2002年)



安曇野映画祭での対談。(2006年)

を作ることへの意欲を口にしていました。

学生時代の演劇部の友人で、自らも監督の映画に出演している本山正さん(豊科高家)は「監督は、安曇野を舞台にした世界的な映画の制作を考えていました。台本も出来上がり、キャスティングも決まった段階だったので、映画化できなかったことが非常に残念です。監督のふるさとに寄せる思いを考えると胸が痛みます」と突然の死を悼みました。

平林市長は「10年ほど前、建て替える前の穂高老人保健センターで行われた『愛する』の撮影を見学させていただいたことが

あります。監督の熱気と迫力に圧倒されたのを覚えています。日本を代表する監督の遺された作品を心に刻み、偉大なる功績に尊敬の念と感謝の意を捧げます」と話しました。

安曇野市が誕生する直前、熊井監督は、安曇野の地域づくりについて、「理想をとことん追求するべきです」と提言しています。

その言葉には、社会と真つ向から向かい合

い、真実を

生活に耐えきれなくなったとき、ある日は創作に行き詰まったとき、常に思ひ起すのは、故郷の清冽な山河であり、私を今日まで温かく見守ってくれた方々の姿です」と語っていた。

見つめ続けた熊井監督の精神と、故郷への深い愛情がにじみ出ています。

